

あいまいな対人関係場面における拒絶過敏性がもたらす回避コーピングのプロセス

The process of escape-avoidance coping caused by interpersonal sensitivity
in ambiguous situations.

臨床心理学研究科 臨床心理学専攻 1000-170704 金 知鮮

指導教員:小澤 真 教授

問題・目的

本研究では、対人関係における個人の脆弱性要因として「拒絶過敏性」を取り上げ、先行研究を展望した。その結果、以下のような課題が整理された。①Boyce & Parker (1989)は、拒絶過敏性は歪んだ認知をもたらすと述べているが、明確な定義はされておらず、ほとんど検討されていない。認知の歪みについて、あいまいな対人関係を拒絶として認知すること(黒田, 2011)、ストレスと遭遇した際に自動思考が生起されること(Beck, 1963)の二つの側面から検討することが可能であると考えられた。②拒絶過敏性の従来の研究の多くは拒絶を回避するために行う対処行動について「相手へ接近する方向」を扱っているが、「相手から遠ざかる方向」も拒絶を受け取らないための対処として考えられた。③回避コーピングはその用い方によって意味が異なる(森田, 2008)ため、拒絶過敏性によってもたらされる回避コーピングがどのような意図で選択されているかを解明する必要があると考えられた。

本研究の第一目的は、以上の課題を総合した仮説モデルを検証することで、あいまいな対人関係場面における拒絶過敏性が回避コーピングの選択をもたらすまでのプロセスを検討することとした。第二目的は、あいまいな対人関係において拒絶過敏性の高さによって選択される回避コーピングが異なると考えられ、その差異について検討することとした。

方法

調査対象者:関東 A 大学および短期大学に在籍している女子大学生 253 名。

質問紙構成:

- ①フェイスシート(本調査の主旨と倫理に関する事項を記し、それらに同意した対象者に属性を尋ねた)
- ②自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982)
- ③日本語版拒絶過敏性尺度(巢山他, 2014b)
- ④被害的思い込みへのとらわれやすさ尺度(大津・小川, 2007)

⑤以下の指標に回答する際に④で回答を求めた場面を想起させるため、教示文を記した。

⑤-1 改訂版自動思考尺度(児玉・片柳・嶋田・坂野, 1994)

⑤-2 回避型コーピングの用いられ方尺度(森田, 2008)

⑤-3 大学生用対人ストレスコーピング尺度(加藤, 2000)

結果・考察

第一目的の仮説モデルの検証のために共分散構造分析を用いたパス解析を行った。モデルによれば、拒絶過敏性によってあいまいな対人関係を拒絶として受け取る傾向が増加し、その後に想起した自動思考の種類によって二つの異なるコーピングが選択されることが示された。自動思考の種類がコーピング選択の分かれ目となったことについて、拒絶過敏性が高い者は想起された自動思考の種類によって異なる感情を抱き、各々の感情がコーピングの選択に影響を及ぼしたのではないかと推察した。

第二目的の検討するために一要因分散分析を行った結果、拒絶過敏性が高い者は相手から遠ざかることで拒絶を回避しようとする対処行動を取りやすいことが示された。質問項目を吟味した結果、ポジティブ関係コーピングにおいて、研究協力者が複数の動機づけをもとに回答している可能性が考えられた。その他にも、本研究と巢山(2016)は研究方法が異なっており、よって研究結果が一致しなかったと考えられた。

本研究では拒絶過敏性の特性的な認知と反応的な認知を示唆している可能性があると考えられた。また、拒絶過敏性が高い者が行う拒絶を回避するための対処行動はその方向性に関わらず、対人関係上の認知の歪みを修正する機会を喪失させると考えられた。さらに、本研究ではあいまいな対人関係場面において拒絶過敏性が高い者は、主観的な拒絶の認知に気をとられていると同時に、気になる気持ちを意識から追い出そうとする努力もしていると考えられる。そして両者の間で生じた葛藤が抑うつなどといったストレス反応に影響を及ぼす可能性があるかと推察した。

これらの結果を踏まえて拒絶過敏性が高い者に対する介入法として、①認知行動療法を用いた介入、②心理教育による介入、③拒絶に気を取られている側面とその気持ちを意識から追い払おうとする努力の側面の間に生じた葛藤への介入といった方法が有効である可能性が示唆された。